

P-031

幼稚園における子どもが前向きに
小児科受診できるようになるための
取り組み

内山由美子

¹帝京大学

【研究の背景】

本研究は、子どもが怖がらずに医療機関を受診し、前向きに診察や検査を受けられるようになるための健康教育を幼稚園で行う実践方法を検討するものである。既に歯科受診準備支援の実践を行っているが、園により受診準備のための健康教育ニーズが大きく異なるため、各園の健康増進への取り組みの特色や意向を把握したうえで検討を行う必要があることがわかっている。

【目的】

本研究では、子どもの健康増進に積極的な幼稚園を対象とし、小児科受診場面を紹介する動画を活用した健康教育を試験的に実施することを通して、園児が診察の流れと診察や検査の意味を理解し、前向きに受診できるようになるためにはどのような働きかけが必要であるかについて検討することを目的とした。

【方法】

2024年1月に、都内のA幼稚園の年長児3クラス合計56名を対象として、筆者の先行研究をもとに制作した動画を用いた「小児科探検」のお話会を行った。お話会は園のホール1カ所に園児が全員集合する形式で行い、ファシリテーターは筆者が務めた。今回用いたお話会の構成案は、人形が小児科外来を探検しながら診察の流れや診察・検査の意味、診察を受けるためのコツと練習方法を教えるという動画の展開に沿った内容となっている。データ収集は、園児の様子をビデオ撮影し、発言や反応を「恐怖」「不快」「経験の共有」「前向きな姿勢」というテーマに沿って抽出し、テーマごとに逐語録を作成して行った。動画の構成案と各テーマの逐語録のテキストを照合し、健康教育実践に向けた構成の方向性を検討するための考察を行った。

【結果・考察】

お話会では園児全員で動画を視聴することにより、受診経験を他の園児とともに振り返りながら経験の共有を行うことができた。「恐怖」は未知の経験に対する不安や、何故それを行うのかについて理解していないことに、「不快」は処置等をどのくらいの時間我慢すれば良いかわからないことに由来していることが示された。園児の中には恐怖や不安を乗り越えた児もあり、これらの経験と感情を園児同士で共有し合うことを通して、「頑張る」という姿勢が引き出された可能性がある。実践においては、ファシリテーターや担任が、園児が経験の共有を通し、お話会の中に自然に前向きな姿勢が作られるような場面づくりをすることが必要であると考えられた。

P-032

幼児の生活習慣と保護者のストレス

黒谷万美子¹、竹内日登美²、井成真由子³、中出 美代³¹愛知学泉大学²高知大学³東海学園大学

【目的】

近年、少子化や核家族化の進展並びに地域社会の連帯感や教育力の低下により、育児ストレスの蓄積しやすい環境にあると言われている。基本的な生活習慣の形成は、乳幼児期のこどもの発達や保育を考える時、非常に重要な課題の一つである。そこで本研究では、育児ストレスやこどもの生活習慣の状況について明らかにすることを目的とした。

【方法】

1.調査対象:高知市内の保育園に通う幼児を持つ保護者を対象に自記式アンケートを実施し、ほとんど記入されていない者を除く416人の保護者について調査分析を行った。2.調査期間:2023年2月に実施した。3.調査内容:調査内容は、主として次の項目からなっている。①属性(性別、年齢など)②育児ストレス、不安について(程度、相談者・世話人の有無など)③こどもの生活習慣(生活リズム、食事、TV・ゲーム・動画視聴など)④しつけについて(大声を出す、スキンシップなど)4.倫理的配慮:調査実施に当たっては、高知大学倫理委員会にて倫理的に問題を有しないと判断後、対象者には研究の主旨、プライバシーの保護について書面で説明し自由意志による協力を求めた。協力の拒否の機会を保障した上で、情報管理に十分配慮し研究を行った。5.分析方法:統計解析にはSPSS25.0 for Windowsを用い、検定は χ^2 検定およびMann-Whitney-Utestを行い、有意水準は5%(両側検定)とした。

【結果と考察】

性別では男性26人(6.3%)、女性388人(93.7%)であった。年齢別では30歳代が最も多く173人(42.3%)、次に40歳代150人(36.7%)、20歳代(12.0%)、50歳以上37人(9.1%)であった。育児ストレス度(低群・高群)2群別に生活習慣をみた結果、ストレス低群の方が夕食(食欲や時間)($p=0.026$)と衛生習慣(歯磨きやお風呂)($p=0.016$)が高値であった。育児ストレス度別にしつけをみた結果、ストレス度高群の方が大声を出す($p<.001$)、怒る・叱る($p<.001$)、手が出そうになる($p<.001$)が高値であり、よくスキンシップをする($p=0.027$)が低値であった。保護者とこどもが楽しみながら家庭で生活習慣の重要性や方法を話し合い、常に意識し改善していくことが重要であり様々な機会を捉えたきめ細かな支援が不可欠である。